四ノ側遺跡

－　都留児童相談所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査　－

2006. 3

山梨県教育委員会
山梨県福祉保健部

全体写真（北側より撮影）

全体写真（南側より撮影）

序　　文

本書は、山梨県埋蔵文化財センターが平成17年度に発掘調査を実施した都留児童相談所建設事業に伴う四ノ側遺跡の発掘調査報告書です。

本遺跡は山梨県東部の都留市田原地区に所在し、忍野八海周辺を源として途中、相模川と名前を変え相模湾に下る桂川の右岸に形成された段丘上に占地しております。この田原地区は、県内での奈良・平安時代研究には欠かせない資料を数多く検出した三ノ側遺跡や、八ツ沢遺跡・山ノ神遺跡などの縄文時代遺跡が周知されている地域です。こうした中、四ノ側遺跡の発掘調査では、約１ヶ月間で、おおよそ550㎡という限られた範囲の調査ではありましたが、10世紀中頃と推される住居跡や土坑など貴重な遺構・遺物が発見されました。これらが、周辺部に存在する同時期の遺跡より検出されているデータに加えられることで、古代県東部地域のより詳細な研究材料となることは間違いないと思われます。

この報告書が、多くの方々の研究および地域学習の一助になれば幸甚です。末筆ながら種々の御指導並びに御協力を賜った関係各位、調査や整理作業に従事された方々に厚く御礼申し上げます。

2006年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所　長　　渡　辺　　誠

例言・凡例

1．本報告書は、2005年度（平成17年度）に都留児童相談所建設事業に伴い発掘調査された四ノ側遺跡の発掘調査報告書である。
2．四ノ側遺跡は、都留市田原３－３－５に位置している。平成17年２月14日に実施された事前の試掘調査でその存在が明らかとなったものである。
3．発掘調査は、山梨県福祉保健部の委託を受けて山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
4．発掘調査および出土品等の整理は、山梨県埋蔵文化財センターで行い、吉岡弘樹・輿石逸子が担当した。
5．本報告書の編集は吉岡・輿石が担当した。
6．写真は、遺構・遺物ともに吉岡・輿石が撮影した。
7．発掘調査にあたっては、次の方々・機関に御協力・御教示を賜った。記して感謝の意を表す次第である。

（敬称略）

都留市教育委員会
杉本悠樹

8．本報告書の挿図等に関する指示は下記のとおりである。また、これ以外の遺物ドットマークなどの指示については図中に示してある。

【遺構】住居跡・土坑－1／6、カマド－1／4
【遺物】土器類－1／3、石製品－1／5

9．表中の注記番号の記載については、調査年度・遺跡名を示す『05四ノ側』が省略してある。
10．本報告書に関わる出土品および記録図面・写真類などは一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

目　　次

序文
例言・凡例

第１章　調査の経緯と組織
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査経過 …… 1
第３節　調査組織 …… 1

第２章　遺跡の概観
第１節　地理的環境 …… 2
第２節　周辺の遺跡と歴史的環境 …… 2

第３章　調査の方法と基本層序
第１節　調査方法 …… 4
第２節　基本層序 …… 4

第４章　発見された遺構と遺物
第１節　遺跡の概要 …… 8
第２節　検出された遺構
住居跡 …… 8
土　坑 …… 13
旧河道 …… 13

第５章　まとめ
第１節　出土土器類について …… 15

第１章　調査の経緯と組織

第１節　調査に至る経緯

都留児童相談所建設事業に伴い、建設予定地である都留市田原（南都留合同庁舎駐車場）を山梨県埋蔵文化財センターが、平成17年２月14日に埋蔵文化財確認のための試掘調査を実施し、工事予定範囲内の南側部分よりから平安時代（10世紀代）と推測される住居跡や焼土址とされる痕跡のほか平安期の土器類（第14図）を検出した。この結果に基づいた協議から、平成17年５月より約１ヶ月間の調査期間、約550㎡の調査面積が設定された。

第２節　調査経過

【平成16年度】

平成17年２月14日　試掘調査

【平成17年度】

平成17年５月13日　現地において事前協議
平成17年５月17日　発掘調査開始
平成17年５月18日　発掘通知（文化財保護法旧58条の２現99条）を提出
平成17年６月１日　本格的整理作業開始
平成17年６月27日　調査区埋め戻しを確認し調査終了
平成17年６月27日　遺物発見通知を都留警察署に提出
平成17年８月30日　本格的整理作業終了
平成17年９月１日　残務整理作業開始
平成18年３月30日　残務整理作業終了

第３節　調査組織

調査主体　山梨県教育委員会
調査機関　山梨県埋蔵文化財センター
調査担当　主査・文化財主事　吉岡弘樹
　　主任・文化財主事　輿石逸子
発掘作業員　天野亀一　天野きみ子　天野駸一　天野美津子　佐藤あさ子　斧田文夫

整理作業員　佐野眞雪

第２章　遺跡の概観

第１節　地理的環境

都留市は山梨県東部にあり、東は上野原市・道志村、西に富士河口湖町、北は大月市、南に富士吉田市や西桂町・忍野村と接する位置にある。人口は、ここ数年微減傾向にあり現在は約33,500人である。総面積は161.58㎢で山間部域が約９割を超えている。市街地や農地は、山中湖・忍野八海周辺を源とし神奈川県に入り相模川と名前を変え相模湾に注ぐ桂川が市域を南から北に流下する際に形成した河岸段丘上に発達し、国道139号や富士急行大月線、中央自動車道富士吉田線が重なり合うように並列し走っている。

都留市の『つる』の語源は富士山麓より桂川流域にかけての細長い平坦地があたかも蔓のように延びておりその様子から「連葛」・「豆留」と呼ばれたとする考え方や、郡名の『つる』は鶴の羽音を連想させ、さらに延命長寿のに由来するといった仮説が立てられている。

市の成り立ちは1953年（昭和28年）に制定された町村合併促進法により、翌1954年（昭和29年）４月29日に谷村町・宝村・禾生村・盛里村・東桂村の１町４村が合併し、県下４番目の市として都留市が誕生している。

また、主要産業は古来より織物産業が発展している。この織物は谷村地区を主産地とし「郡内織」といわれ、中でも縞模様のものを「郡内縞」と呼び、江戸時代には「甲斐のみやげになにもろた郡内縞にほしぶどう」といわれるほど広く認知されていたものである。しかし、1960年代中頃以降、繊維産業は斜陽化し、機械金属産業が代わって成長してきた。1960年（昭和35年）には都留文科大学が開校し、古くから城下町として培われた歴史的風土に加え、新たに大学を核とし独自性のある街づくりを行っている。

四ノ側遺跡はこの都留市田原地区の、標高は約510mを測る地点に占地している。西方を望むと標高1,786mの三ツ峠が遺跡を凝視している様子が良く分かる。この三ツ峠は奈良時代に修験道の祖としてしられる役小角によって開かれたと伝えられ、一時、衰退するが、江戸時代後期1832年（天保３年）に空胎上人が信仰の山として復興している。現在では、登山道も整備され、手軽にハイキングが楽しめることもあって多くの登山客で賑わいをみせている。

第２節　周辺の遺跡と歴史的環境

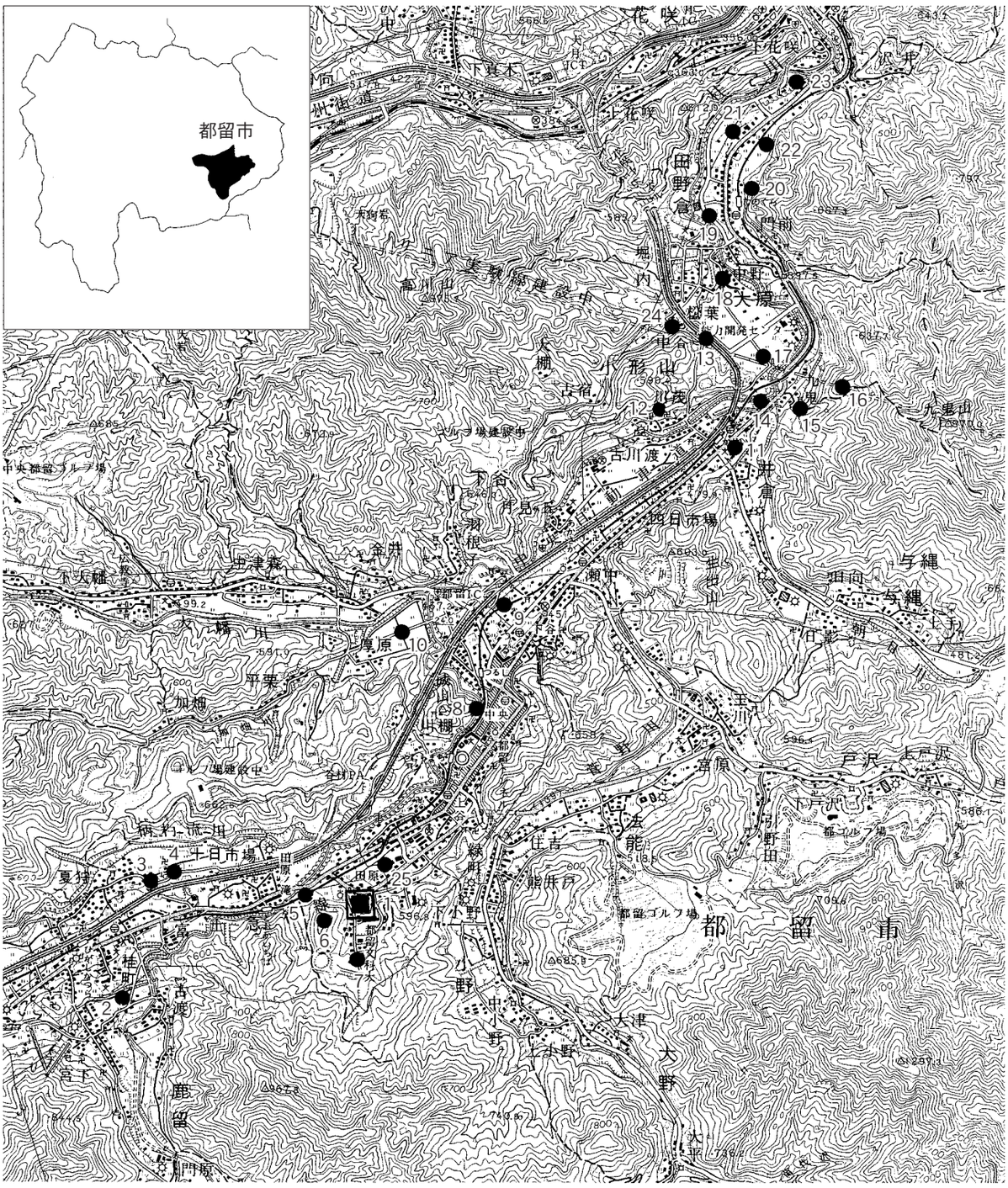
四ノ側遺跡（１）のある都留市域には現在のところ70ほどの遺跡の存在が明らかにされている。その特徴の一つとして特に縄文時代および奈良・平安時代を主とするものが多いことがあげられよう。ここでは、その内の主要遺跡を紹介することとしたい。

２は下溝遺跡である。十日市場地区にあり、以前宅地造成によって遺物が採集されている。３の山梨原遺跡は中央道４車線化により調査されたもので縄文時代の住居跡・土坑のほか平安時代中世以降までの土坑・溝状遺構が確認された。４の下原遺跡は山梨原遺跡の東側に隣接しており、縄文時代と推される散布地として知られている。

田原地区では大堰遺跡（５）・八ツ沢遺跡（６）がいずれも縄文時代の遺跡として遺跡台帳に登録されている。また、山ノ神遺跡（７）からは縄文時代前期の土坑とともに石槍や抉状耳飾りが出土している。三ノ側遺跡（25）は昭和53・56年のほか平成13・14年に調査がなされている。昭和56年調査時においては皇朝十二銭の和同開珎・富寿神宝などの銭貨や銅製小壺・紡錘車など興味深い資料が出土し、郷の中心部に近い位置であるとの指摘を受けている。

川棚地区には土師器が採集された城の腰遺跡（８）がある。都留インターチェンジ周辺では鷹の巣遺跡（９）がある。昭和55・57・58年に合計５件の調査が実施され、平安時代住居跡・土坑・溝状遺構などが多数検出されている。牛石遺跡（10）は桂川とその支流大幡川が合流する河岸段丘上にあり、昭和54・56年の３カ年に渡って調査がなされ、直径50mにもおよぶ縄文時代中期末葉に位置付けられる大環状配石遺構が検出されている。

都留市の北方に位置する田野倉・大原・小形山地区方面に目を向けると縄文時代遺跡が多い中、前ケ久保遺跡（11）・亀石遺跡（12）のように平安時代を主たる時代とする遺跡もみることができる。また、下久保遺跡（14）や九鬼Ⅰ遺跡（15）では縄文・奈良・平安時代の遺物が確認されている。揚久保遺跡（13）・九鬼Ⅱ遺跡（16）・中溝遺跡（17）・中谷遺跡（24）は山梨リニア実験線建設に伴って発掘調査された遺跡である。揚久保遺跡からは縄文時代の陥し穴のほか平安時代と想定される円形土坑が検出されている。九鬼Ⅱ遺跡は平成５年に調査がなされ、結果、縄文時代前期から中期と平安時代の集落が確認されている。また、中溝遺跡は昭和47・48年の調査時に縄文時代中期の新道式や藤内式の住居跡が検出され、平成５年調査時においては平安時代および縄文時代早期末から前期初頭の集落が検出されている。加えて全国的にも最古群と捉えられている抉状耳飾りも出土している。中谷遺跡は高川山の東裾部の高川に沿った位置にある。調査歴は多く昭和39・46・54年とリニア関連の平成５６年の４次に渡って



第１図　遺跡地位置図（Ｓ＝1／50,000）

１：四ノ側遺跡　２：下溝遺跡　３：山梨原遺跡　４：下原遺跡　５：大堰遺跡　６：八ッ沢遺跡
７：山ノ神遺跡　８：城ノ腰遺跡　９：鷹ノ巣遺跡　10：牛石遺跡　11：前ヶ久保遺跡　12：亀石遺跡
13：揚久保遺跡　14：下久保遺跡　15：九鬼Ⅰ遺跡　16：九鬼Ⅱ遺跡　17：中溝遺跡　18：原遺跡
19：中野原遺跡　20：山梨遺跡　21：桃園遺跡　22：神出遺跡　23：先の宮遺跡　24：中谷遺跡
25：三ノ側遺跡

実施されている。結果、縄文時代中期後半から晩期前半の集落が確認されている。特に晩期前半の清水天王山式土器が検出することで当遺跡は注目を浴びている。原遺跡（18）・中野原遺跡（19）・山梨遺跡（20）からは縄文時代中期後半曽利式土器や平安時代土師器が採取されている。また、桃園遺跡（21）では広範囲に縄文時代・平安時代の遺物が確認されている。今回は図示していないが近年、当地域において開発行為が盛んに行われているため、隣接した地点に都留市教育委員会の試掘調査により桃園西遺跡も発見されている。神出遺跡（22）・先ノ宮遺跡（23）では縄文時代前期から後期のほか土師器、須恵器など広い範囲に及ぶ時期の遺物が工事中などに採取されている。

第３章　調査の方法と基本層序

第１節　調査方法

平成17年２月14日に実施された試掘調査によって、工事予定範囲内の南側部分より平安時代と推測される住居跡や焼土址などが検出された。この結果から、平成17年５月より約１ヶ月間の調査期間、約550㎡の調査面積が設定された。

本調査は、試掘調査で得られたデータを基に遺構検出面まで平爪バケット装着の重機によって堆積土の除去を行った。その後、グリッドごとに人力による若干の掘り下げ、精査を行い遺構確認に努めた。グリッドは５ｍの設定とし西から東にＡＢＣＤ... 北から南方向に１２３４... と番号を振り分けた。

なお、調査期間中は山梨県埋蔵文化財センター安全衛生基準を遵守し危険防止等に努めた。

写真１　表土剥ぎの様子

第２節　基本層序

調査対象地は、駐車場であった以前は工場用地であったため、至る所に大きな撹乱坑が存在していた。そこで、遺構などに影響を与えず比較的安定していると推測できたE-１区を選定し深掘りをし層序を観察した。

南都留合同庁舎駐車場として使用されていたため、アスファルト舗装と砕石層が全面に約40㎝厚で敷設されている。その下に約25㎝の茶褐色土層【３層】と80㎝厚の淡茶褐色土層【４層】が確認できる。１層は後世の盛り土層と推測できる。また、３・４層ともに工場用地として使用されていた時に受けた可能性が大きい撹乱が目立つ。【５層】は暗茶褐色を呈し、上層よりもやや大粒のスコリアを観察できる層である。暗黄褐色土層【６層】は１～２㎜のスコリアを下部に向かうほど多く混入している平安時代の遺構検出面である。さらにその下層、薄黒褐色土層【７層】・淡茶褐色土層【８層】・黄褐色土層【９層】と粘性・しまりを強めていく。なお、７・８層には１～３㎜のスコリアが大量に混入されるが９層にはスコリアの混入が確認できない。今回の調査で確認された層序の最下層は黄褐色砂質土層【10層】である。１～２㎜の砂質土に３～４㎝の円礫が所々に入る。スコリアの混入はみられない。

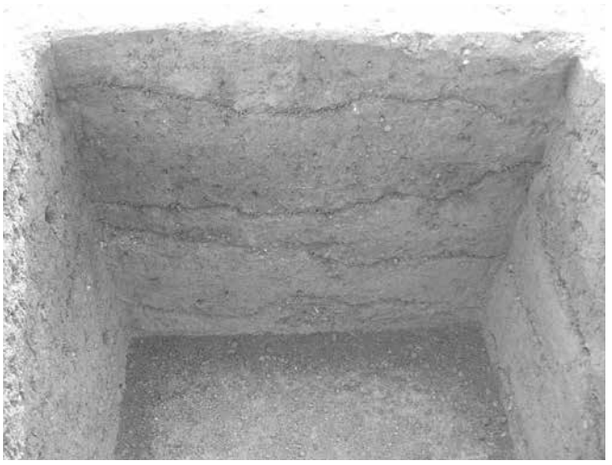
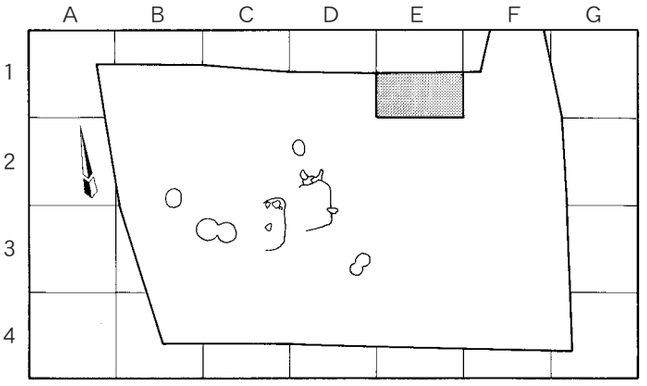
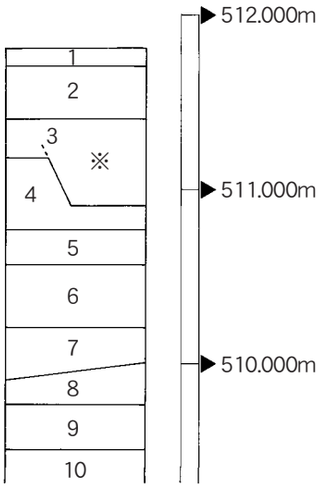


写真２　基本層序堆積状況



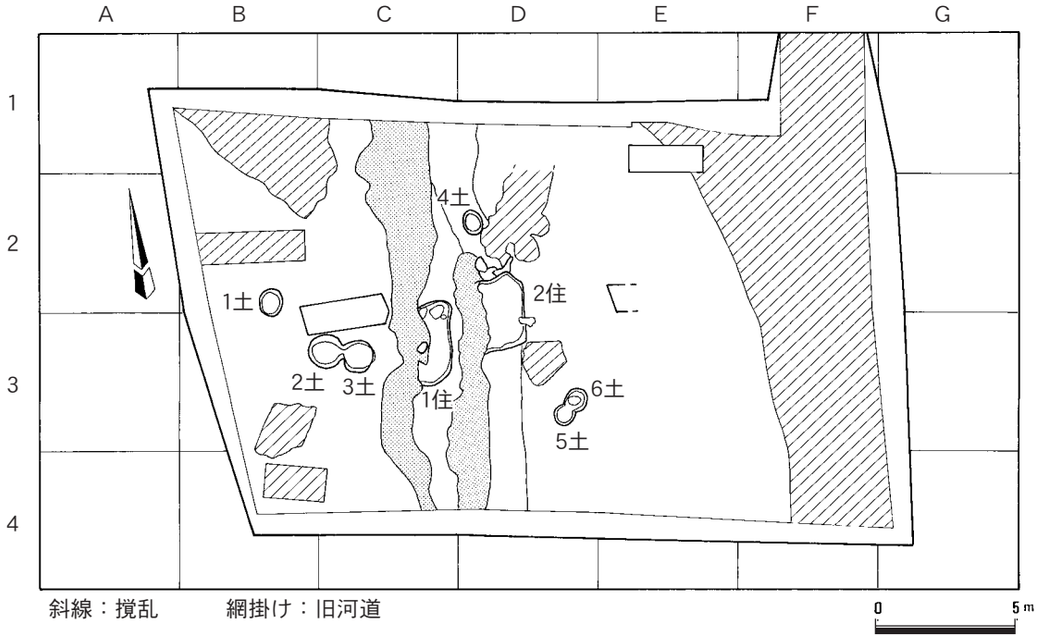
第２図　基本層序観察位置図



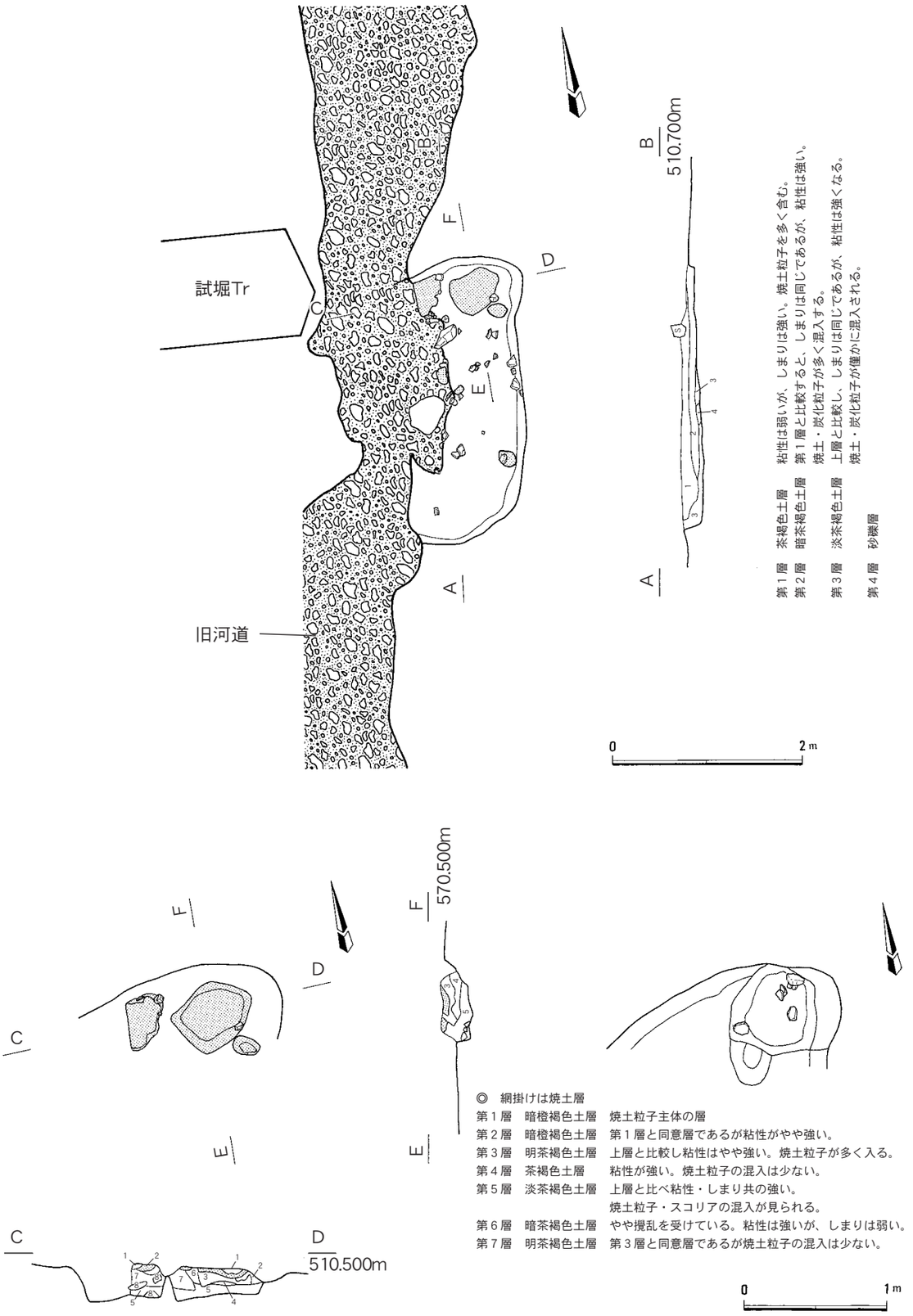
第３図　基本層序柱状図

１層　アスファルト舗装
２層　砕石層
３層　茶褐色土層　　後世の盛り土層。粘性は弱く、しまりは強い。１～３㎜のスコリアがわずかに確認できる。撹乱の影響を多く受けている。
４層　淡茶褐色土層　粘性が弱く、しまりは強い。１～５㎜のスコリアがわずかに混入する。
５層　暗茶褐色土層　粘性・しまりは４層とほぼ同じ。１～10㎜のスコリアがわずかに混入する。
６層　暗黄褐色土層　しまりは４・５層と同じであるが、粘性はやや強い。１～２㎜のスコリアがわずかに観察できる。遺構確認面。
７層　薄黒褐色土層　粘性・しまりは６層とほぼ同じ。１～２㎜のスコリアが多く含まれている。
８層　淡茶褐色土層　粘性・しまりともに７層より強い。１～３㎜のスコリアが多く含まれている。
９層　黄褐色土層　　粘性・しまりともに８層より強い。
10層　黄褐色砂質土層　粘性は感じられないが、しまりは強い。１～２㎜の砂質土に３～４㎝の円礫が所々に混入する。
※　撹乱層

第４図　遺跡範囲図（Ｓ＝1／1,500）



第５図　遺構配置図（Ｓ＝1／250）


試堀Tr
旧河道
A
B
C
D
E
F
510.700m
570.500m
510.500m
0
2m
1m
第１層　茶褐色土層　粘性は弱いが、しまりは強い。焼土粒子を多く含む。
第２層　暗茶褐色土層　第１層と比較すると、しまりは同じであるが、粘性は強い。焼土・炭化粒子が多く混入する。
第３層　淡茶褐色土層　上層と比較し、しまりは同じであるが、粘性は強くなる。焼土・炭化粒子が僅かに混入される。
第４層　砂礫層
◎　網掛けは焼土層
第１層　暗橙褐色土層　焼土粒子主体の層
第２層　暗橙褐色土層　第１層と同意層であるが粘性がやや強い。
第３層　明茶褐色土層　上層と比較し粘性はやや強い。焼土粒子が多く入る。
第４層　茶褐色土層　粘性が強い。焼土粒子の混入は少ない。
第５層　淡茶褐色土層　上層と比べ粘性・しまり共の強い。焼土粒子・スコリアの混入が見られる。
第６層　暗茶褐色土層　やや攪乱を受けている。粘性は強いが、しまりは弱い。
第７層　明茶褐色土層　第３層と同意層であるが焼土粒子の混入は少ない。

第６図　第１号住居跡　１

第４章　検出された遺構と遺物

第１節　遺跡の概要

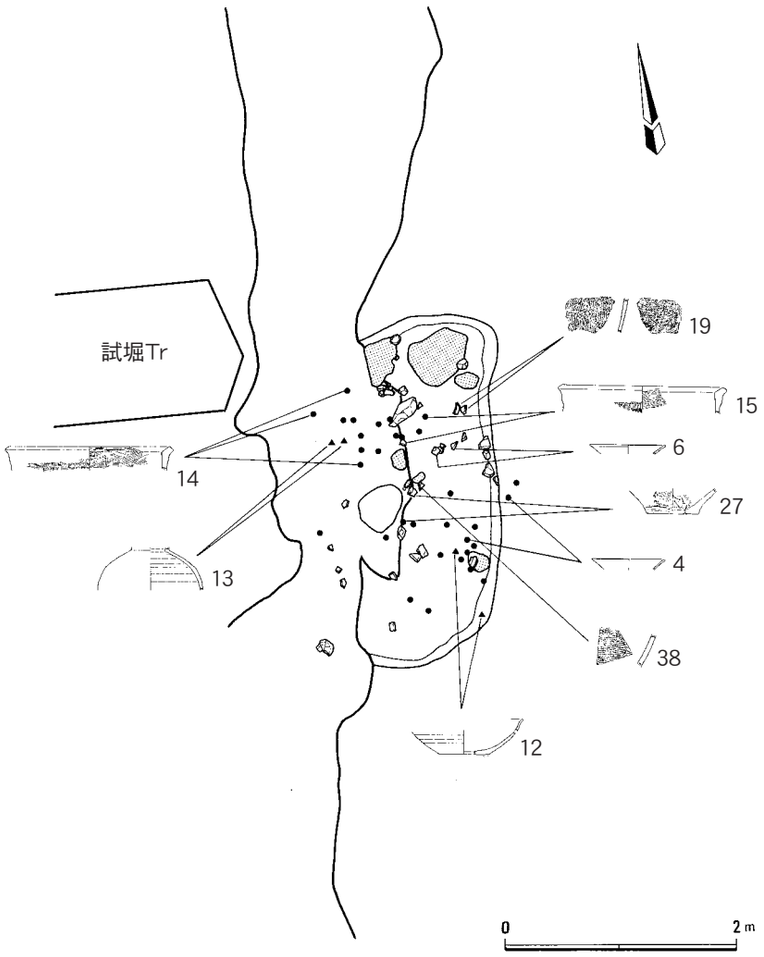
今回の調査地点は隣接する現都留文科大学図書館部分も含め、工場用地であった場所である。このため、各所に土の入れ替えなどで生じた撹乱や層序の乱れが確認された。なお、都留文科大学図書館建設に伴う都留市教育委員会の確認では遺構の検出がされなかったと聞く。

また、地元関係者の話によれば当該地近くの本来の地形は東側の山裾より細い尾根が延びてたとのことである。この尾根は道路工事や用地拡張の際に削平されて平坦地化されてしまっている。この、事実から今回の調査においては隣接した三ノ側遺跡より広がると推定できる集落の端部にあたる平安期当時の山裾の地形利用の様子がつかめるよう配慮しながらの調査に努めた。

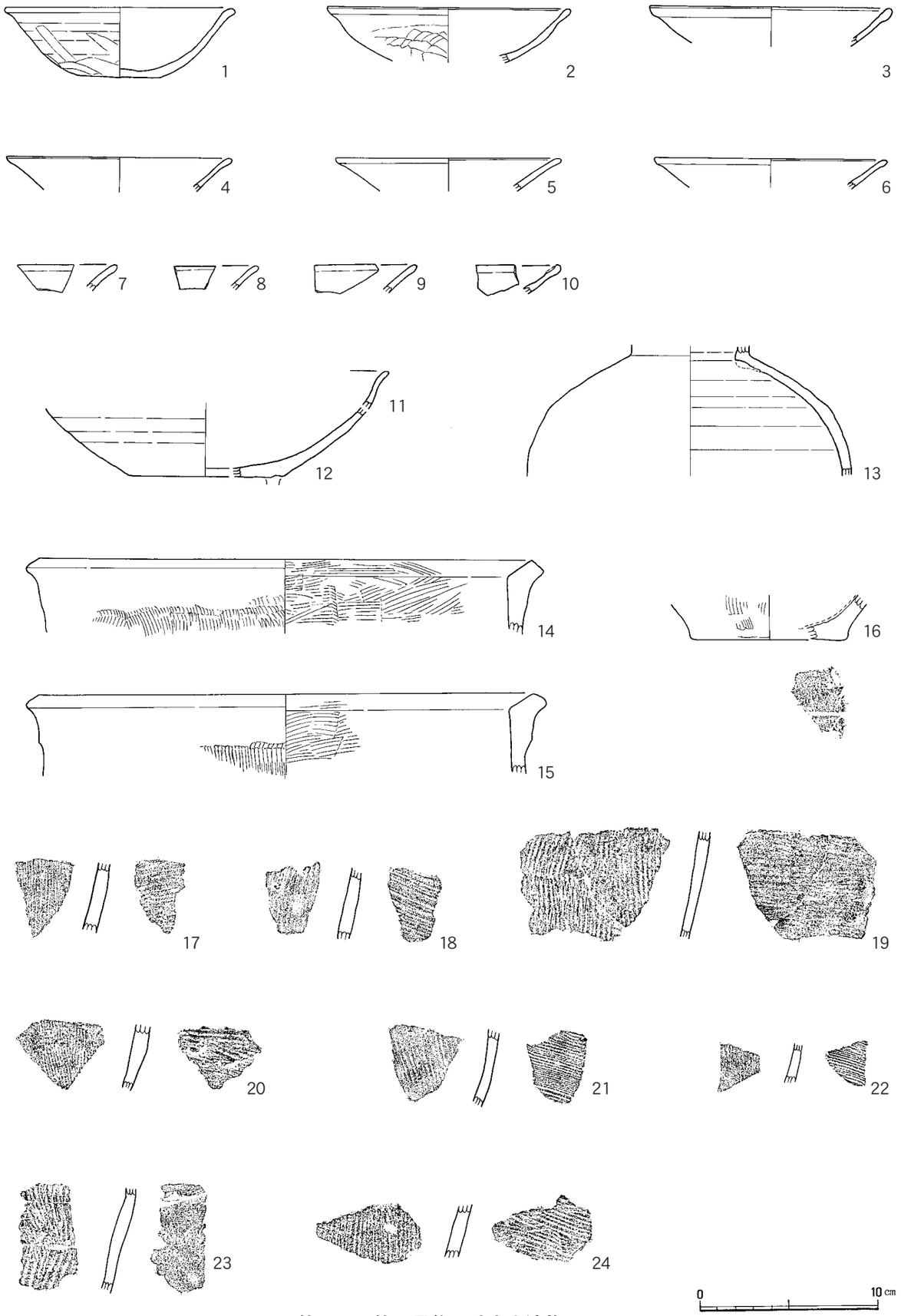
第２節　検出された遺構

◎【住居跡】

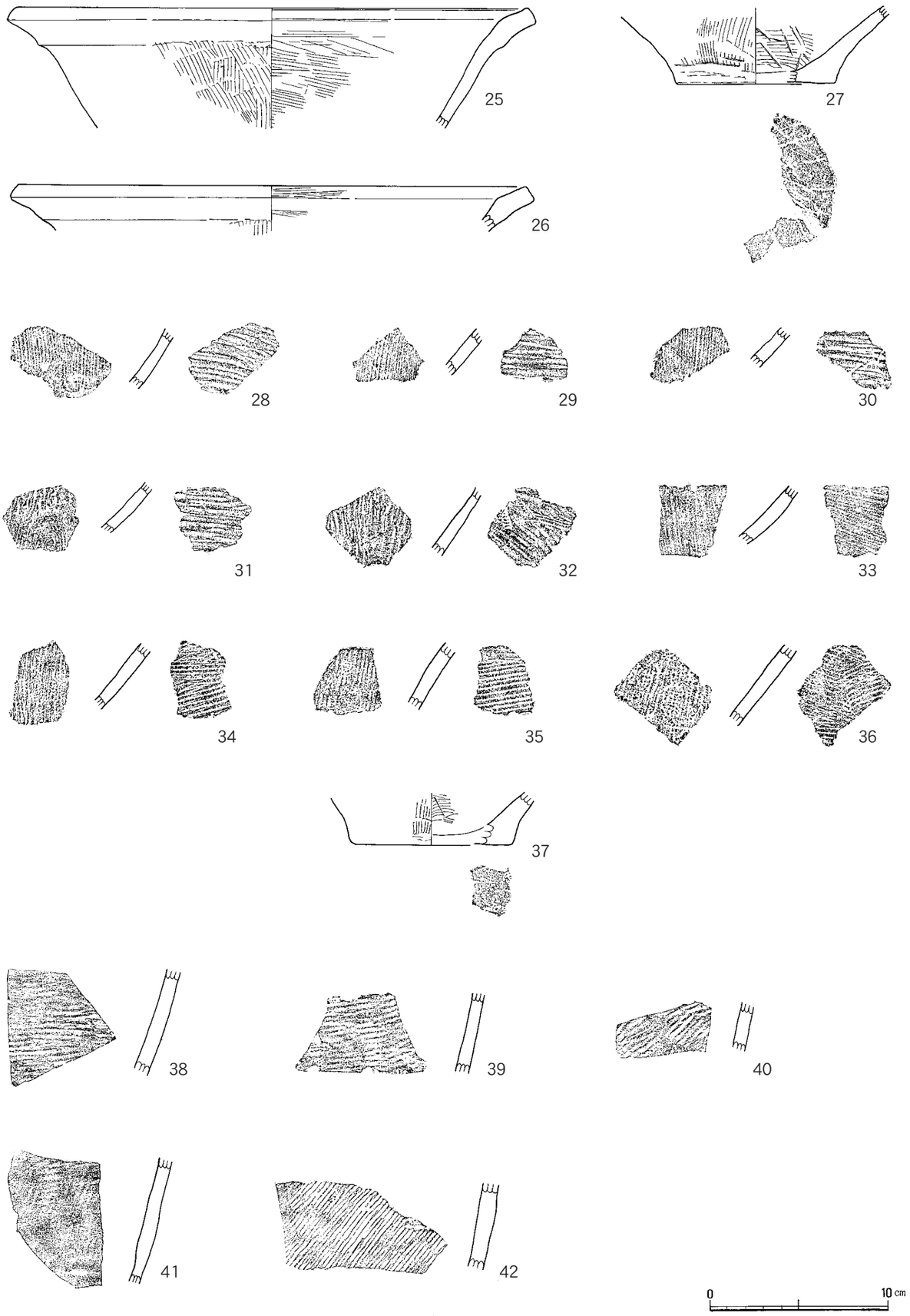
今回の調査では、平安期を想定できる若干小ぶりの竪穴式住居跡が２軒検出されている。これらは調査区の中央に



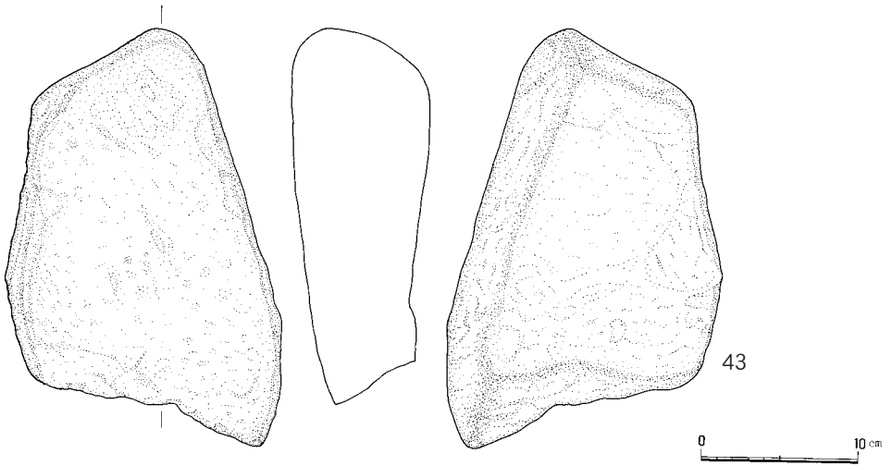
第７図　第１号住居跡　２



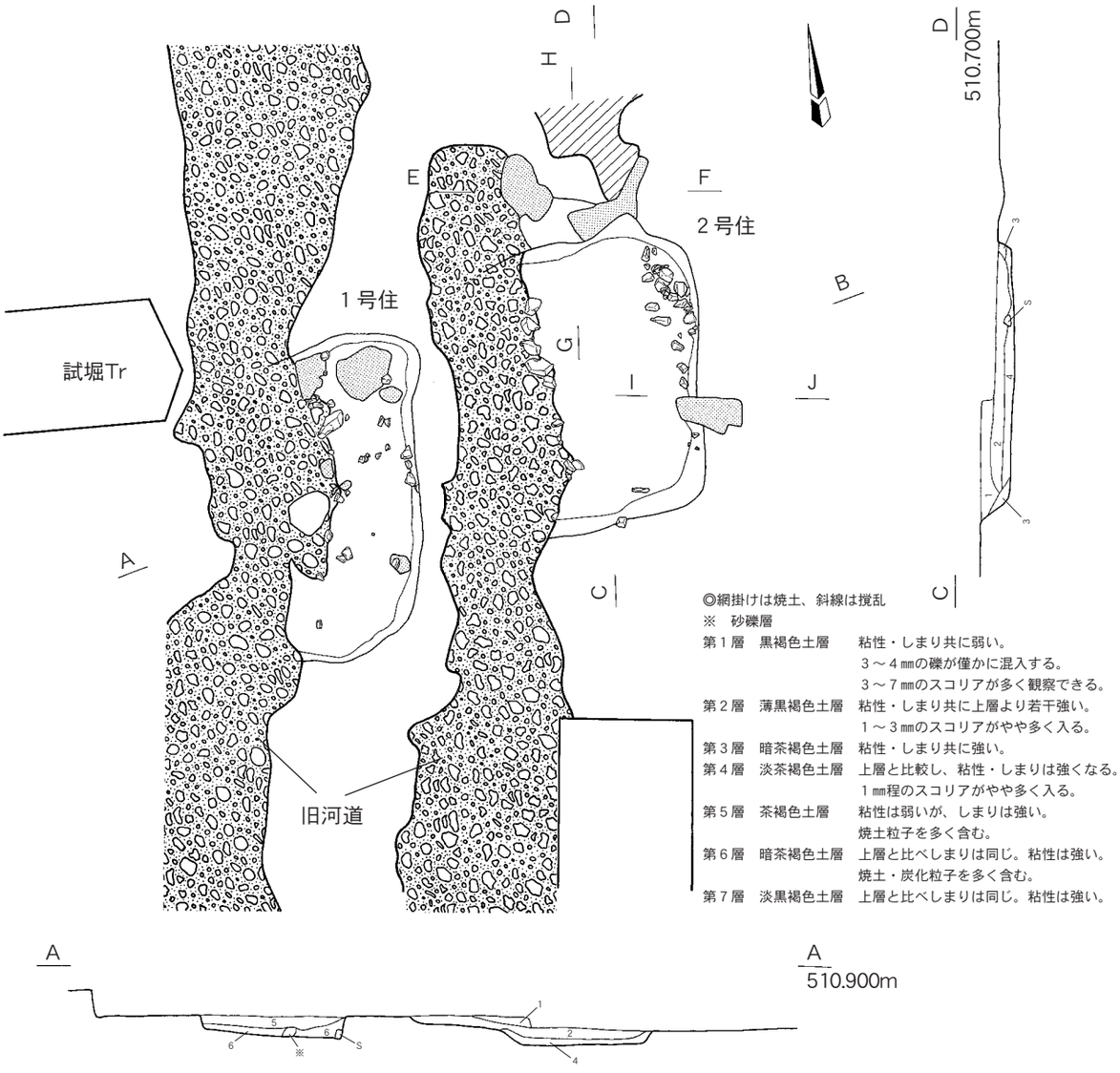
第８図　第１号住居跡出土遺物　1



第９図　第１号住居跡出土遺物　2



第10図　第１号住居跡出土遺物　3

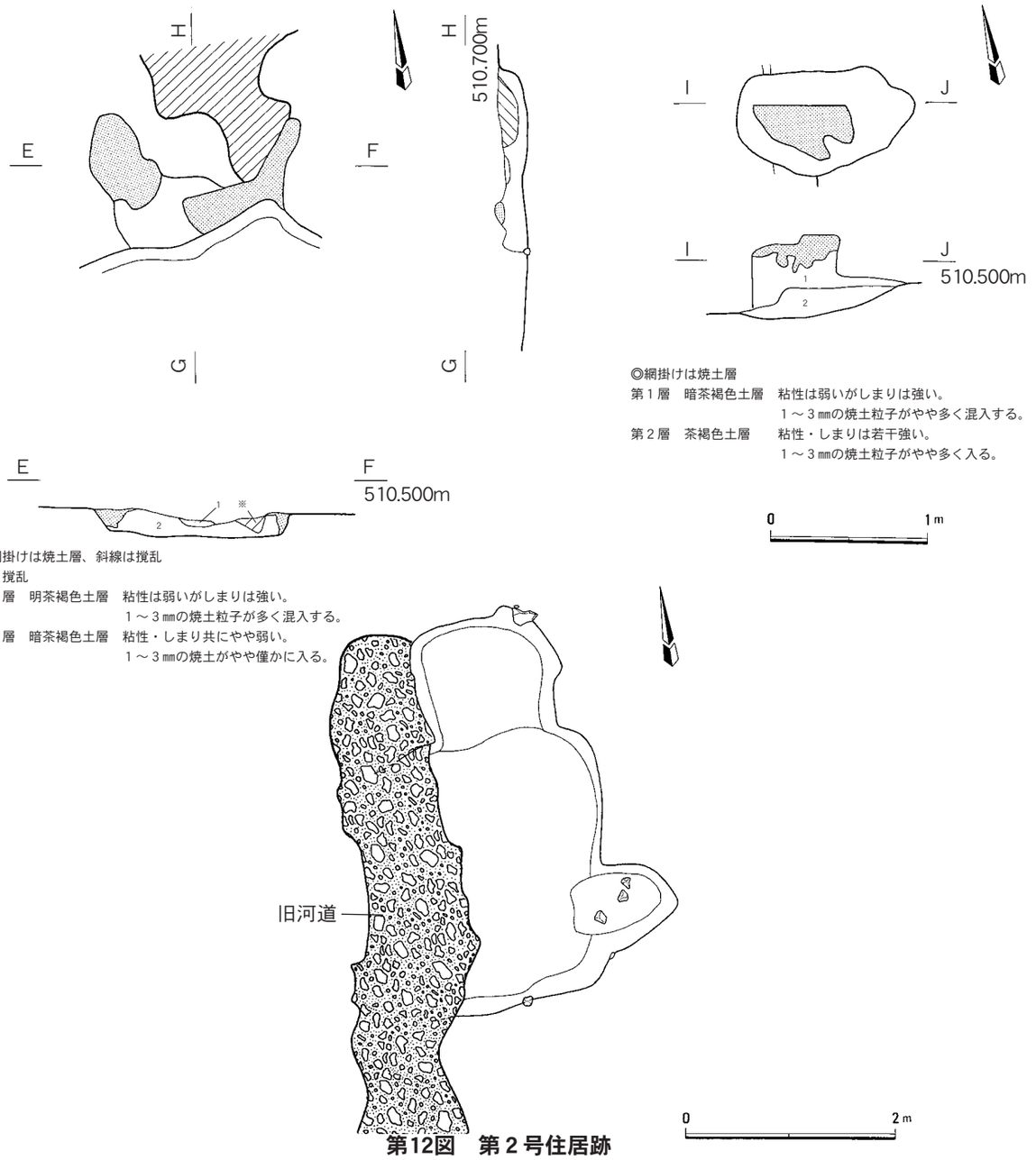


第11図　第１・２号住居跡

隣接して確認され、双方とも、山側からの土砂の流入によって1/2程が削平された状態で検出されたものである。

第１号住居跡（第６～11図）

C-２・３区にまたがり検出された。不整形の隅丸方形状を呈しているものと思われるが西側のほぼ半分を南山側より流入した土砂礫により削平されてしまっているため正確な形状は不明である。現存する南北方向の長さは281mを測り、主軸方位はおおむねＮ－３°－Ｅに求められる。床面は水平で平坦に構築されており、平均床面高度は510.407mの標高を有している。壁は若干の傾斜を保ちながら直線上に立ち上がっており、確認された高さは最大約19㎝を測る。竈は北東部コーナーに設置されているが礫の検出はなく焼土混じりの粘質土が広範囲に散っていることなどから住居廃絶時に大きく破壊されたことがうかがい知れよう。遺物は確認された床面のほぼ全域から検出されている。土師器では坏・皿・甕・鉢、灰釉碗・壺、須恵器甕が主たる構成遺物である。このほか台石と推定できる扁平な石材の検出もみられた。これらの資料から当住居跡は10世紀中葉の構築と考えられる。



第12図　第２号住居跡

第２号住居跡（第11・12図）

D-２・３区に位置しており、西側に隣接して第１号住居跡が検出されている。平面形は隅丸方形状を呈していると思われるが第１号住居跡と同様に南山側より流出した砂礫により2/5程が削平されてしまっており全容は明らかにされていない。その規模は南北方向で2.64mを測るものである。なお、主軸方位はＮ－２°－Ｅを測り、平均床面高度は510.334mを測る。壁はやや緩やかな傾斜を持って立ち上がりを見せ、その高さは最大で25.8㎝を測る。竈は住居北側と東側の２箇所から検出された。北側の竈は住居廃絶時に破壊されたとみえ焼土と竈構築に使用されたと推される粘質土が大規模な構成の撹乱を受けていたものの広く平面的に確認された。他方、東側の竈は試掘トレンチ開削時にほぼ半分が削平された状態で検出されている。遺物は図示できうるものはないが土師器等の小破片が出土しており、それらや検出層序などから住居構築年代は10世紀中葉～後半としておきたい。

◎【土坑】

土坑は計６基が調査区中央から西側に検出された。それらは多くの平安期の遺跡から確認されている、いわゆるたらい形状の円形土坑で概ね1.2m程のものと1m以下のものに分類することができる。

第１号土坑（第13図）

調査区の西側、B-２・３区より検出された。平面形は不整円形を、断面形は浅い丸形を呈している。長径0.98m、短径0.84m、内深0.18mを測る。覆土は若干の撹乱がみられるものの６層に分層できる。出土遺物は確認できなかったが、検出面や周囲の状況などから平安期に構築された可能性が強い。

第２・３号土坑（第13図）

調査区のやや西側、第１号土坑に隣接した位置（B・C-３区）に連結した形で検出された。

第２号土坑は、ほぼ正円形の平面形状を有し、断面形はたらい状を呈している。長径約1.2m、短径約1.18m、深度0.37mを測る。

第３号土坑も、同様にほぼ正円形の形状を有している。断面形もたらい状を呈しているが東側で僅かなオーバーハングをみせる。規模は長径約1.2m、短径約1.12m、深度0.45mを測る。

覆土の状況は底面近くでの分層が可能であり２層となる。双方の切り合い関係については層序から第３号土坑が構築された後に第２号土坑が開口された。それぞれの時期については層序より時期差が捉えられているものの同じ平安期と考えられよう。なお、図示できる遺物の出土はなかった。

第４号土坑（第13図）

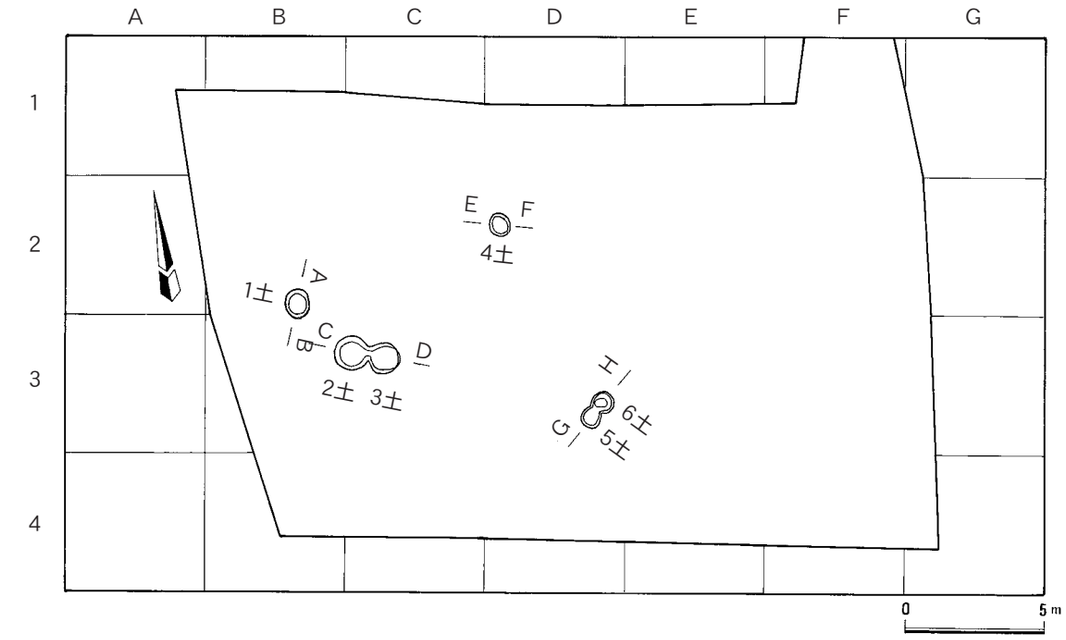
調査区中央やや北寄りのD-２区より検出された比較的小型の土坑である。平面形は不整楕円形状を取っている。断面形は僅かに丸みを帯びたたらい状を呈しており、壁はほぼ直線上に上方に延びている。規模は長径約0.85m、短径約0.67m、深度約0.27mを測る。覆土は底面やや上において２層に分けることができる。また、遺物の出土は認められなかった。構築された時期は他の遺構と同様の検出面のため、平安期を比定できよう。

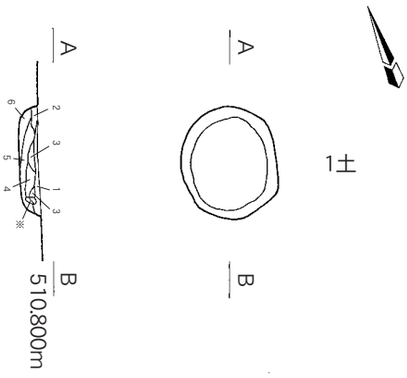
第５・６号土坑（第13図）

調査区中央やや南寄りの地点D-３区に連結して検出された。双方ともに平面形は正円形に近い。断面形は第５号土坑は上方に向かって開きながら立ち上がる壁を持つたらい形状、第６号土坑は丸みを持ちながら立ち上がる浅い丸形形状を呈している。規模は第５号土坑については長径約0.72m、短径約0.65m、深度約0.14m、第６号土坑は長径約0.78m、短径約0.76m、深度約0.16mを測る。覆土は単層であるが非常に浅く検出されたため切り合い関係は判断できなかった。なお、図示できる遺物の出土はなかった。時期については土坑が検出された層序より平安期を想定している。

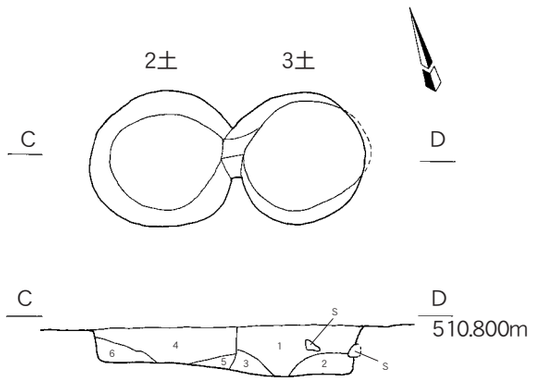
◎【旧河道】（第11図）

調査区の中央部（C-1～4・D-2～4）第１・２号住居跡をそれぞれ押し流すように東側より流れ込んむ２条の旧河道が検出された。ほぼすべてに小型の砂礫が充填されており、上流部から勢いよく流下した土石流が平坦部のおいて収束する端部にであることが想定できる状況にある。遺物の出土はみられなかったが住居跡の構築想定年代が10世紀中葉であることから、その直後に発生した土石流の可能性が強い。

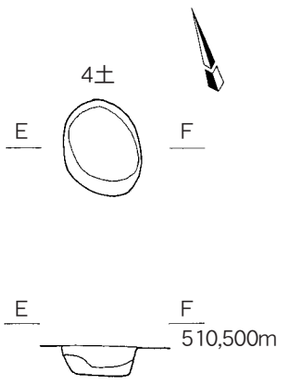


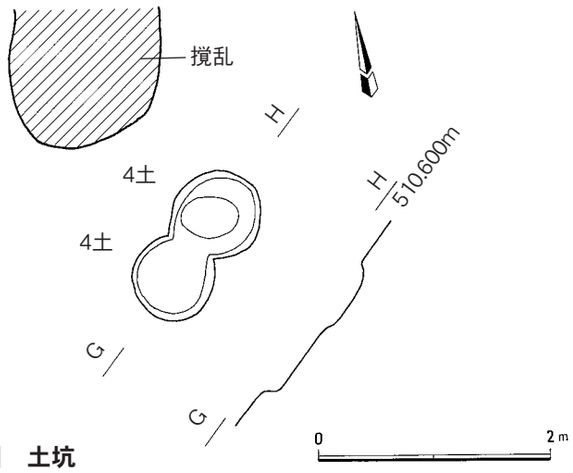


※　撹乱
第１層　暗黒褐色土層　　粘性・しまり共に弱い。
第２層　暗黄褐色土層　　粘性・しまり共にやや弱い。
第３層　淡黄褐色土層　　粘性・しまり共に強い。
第４層　淡黄茶褐色土層　粘性・しまり共に強い。
第５層　黄茶褐色土層　　粘性・しまり共にやや弱い。
第６層　茶褐色土層　　粘性・しまり共にやや弱い。

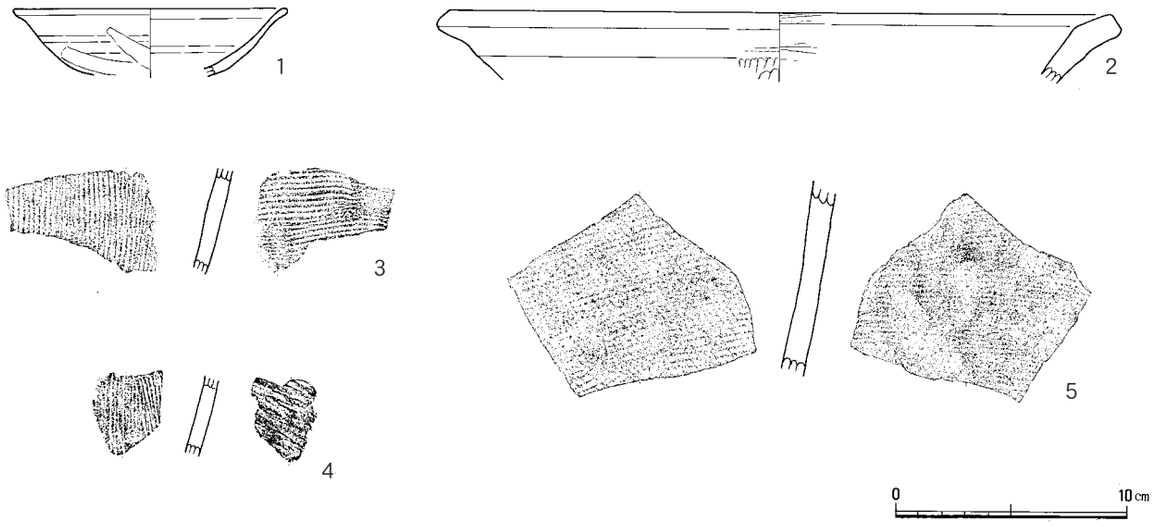


第１層　茶褐色土層　　粘性・しまり共にやや弱い。スコリアの混入が多くある。
第２層　暗茶褐色土層　粘性・しまり共に強い。
第３層　暗茶褐色土層　粘性・しまり共に強い。
第４層　淡茶褐色土層　粘性・しまり共に僅かに強い。僅かにスコリアの混入がみられる。
第５層　暗茶褐色土層　粘性・しまり共に僅かに強い。僅かにスコリアの混入がみられる。
第６層　茶褐色土層　　粘性・しまり共に僅かに強い。





第13図　土坑



第14図　試堀調査時出土遺物

第５章　まとめ

第１節　出土土器類について

本遺跡からは２軒の住居跡が検出されており、中でも、出土土器類の豊富な第１号住居跡では坏・皿と甕・鉢に若干の時期差が感じられる。坏・皿類においては、若干下膨れ状の体部下半に全面箆削りがなされて口唇部も玉縁を呈する甲斐型土器編年ＸⅡ期（10世紀前葉～中葉）と比定される。他方、甕・鉢類では、甲斐型土器編年ＸⅡ期の特徴が口縁部の特徴として肥厚が極限となるが、口縁部の特徴である肥厚に加え胴部においての器厚も増大してくる甲斐型土器編年ＸⅢ期の特徴に接近しているように捉えられる。この傾向は平成13年度後半から14年度初旬まで都留市教育委員会によって発掘調査された当遺跡に隣接した三ノ側遺跡C地点２号住居跡にもみられるものである。

また、このＸⅡ期・ＸⅢ期の共通する特徴として坏・皿・甕・鉢などの土師器類に加え灰釉陶器が共伴することがあげられよう。さらに作業に使用したと想定できる台石が確認されたことも、当住居に居住していた人々の生活の一端をうかがわせる遺物の一つであろう。

《出土土器類 観察表》

No.	遺構	注記No.	種別	器種	口径〔cm〕	器高〔cm〕	内深〔cm〕	底径〔cm〕	色調	胎土	焼成	調整	残存率〔%〕	時期	備考
1	1住	51	土師器	坏	12.80	3.80	3.40	4.50	明茶褐色	密	良好	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	75	平安	
2	1住	48	土師器	皿	(13.40)	—	—	—	明茶褐色	密	良好	ﾅﾃﾞ	—	平安	
3	1住	32	土師器	皿	(13.40)	—	—	—	明茶褐色	密	良好	ﾅﾃﾞ	—	平安	
4	1住	28 35	土師器	皿	(12.60)	—	—	—	明茶褐色	密	良好	ﾅﾃﾞ	—	平安	
5	1住	44	土師器	皿	(12.60)	—	—	—	明茶褐色	密	良好	ﾅﾃﾞ	—	平安	
6	1住	41 43	土師器	皿	(13.00)	—	—	—	淡黄褐色	密	良好	ﾅﾃﾞ	—	平安	
7	表土		土師器	皿	—	—	—	—	淡茶褐色	密	良好	ﾅﾃﾞ	—	平安	
8	1住	53	土師器	皿	(12.60)	—	—	—	明茶褐色	密	良好	ﾅﾃﾞ	—	平安	
9	E-2	E-2	土師器	皿	—	—	—	—	淡茶褐色	密	良好	ﾅﾃﾞ	—	平安	
10	1住	25	土師器	皿	—	—	—	—	明茶褐色	密	良好	ﾅﾃﾞ	—	平安	
11	C-3	C-3	灰釉	碗	—	—	—	—	灰白色	密	良好	ﾅﾃﾞ	—	平安	
12	1住	22 30	灰釉	碗	—	—	—	(8.40)	灰白色	密	良好	ﾅﾃﾞ	—	平安	
13	1住	8 9	灰釉	壺	—	—	—	—	灰白色	密	良好	ﾅﾃﾞ	—	平安	
14	1住	1 2 7	土師器	甕	(27.40)	—	—	—	明茶褐色	密	良好	ﾊｹ・ﾅﾃﾞ	—	平安	
15	1住	12 14	土師器	甕	—	—	—	—	明茶褐色	密	良好	ﾊｹ・ﾅﾃﾞ	—	平安	
16	1住	21 表土剥ぎ	土師器	甕？	—	—	—	(8.60)	明茶褐色	密	良好	ﾊｹ	—	平安	
17	1住	20	土師器	甕？	—	—	—	—	明茶褐色	密	良好	ﾊｹ	—	平安	
18	試Tr		土師器	甕？	—	—	—	—	明茶褐色	密	良好	ﾊｹ	—	平安	
19	1住	38 39	土師器	甕？	—	—	—	—	茶褐色	密	良好	ﾊｹ	—	平安	
20	1住	40	土師器	甕？	—	—	—	—	茶褐色	密	良好	ﾊｹ	—	平安	
21	1住	1住	土師器	甕？	—	—	—	—	茶褐色	密	良好	ﾊｹ	—	平安	
22	1住	カマド	土師器	甕？	—	—	—	—	茶褐色	密	良好	ﾊｹ	—	平安	
23	1住	26	土師器	甕？	—	—	—	—	茶褐色	密	良好	ﾊｹ	—	平安	
24	1住	49	土師器	甕？	—	—	—	—	茶褐色	密	良好	ﾊｹ	—	平安	
25	1住	5	土師器	鉢	(28.40)	—	—	—	茶褐色	密	良好	ﾊｹ・ﾅﾃﾞ	—	平安	
26	1住	15	土師器	鉢	(28.40)	—	—	—	茶褐色	密	良好	ﾊｹ・ﾅﾃﾞ	—	平安	
27	1住	17 46	土師器	鉢？	—	—	—	(9.00)	茶褐色	密	良好	ﾊｹ	—	平安	
28	1住	13	土師器	鉢？	—	—	—	—	茶褐色	密	良好	ﾊｹ	—	平安	
29	1住	4	土師器	鉢？	—	—	—	—	茶褐色	密	良好	ﾊｹ	—	平安	
30	1住	11	土師器	鉢？	—	—	—	—	茶褐色	密	良好	ﾊｹ	—	平安	
31	1住	34	土師器	鉢？	—	—	—	—	暗茶褐色	密	良好	ﾊｹ	—	平安	
32	1住	43	土師器	鉢？	—	—	—	—	茶褐色	密	良好	ﾊｹ	—	平安	
33	1住	24	土師器	鉢？	—	—	—	—	茶褐色	密	良好	ﾊｹ	—	平安	
34	1住	50	土師器	鉢？	—	—	—	—	黒褐色	密	良好	ﾊｹ	—	平安	
35	1住	54	土師器	鉢？	—	—	—	—	茶褐色	密	良好	ﾊｹ	—	平安	
36	1住	57	土師器	鉢？	—	—	—	(9.00)	茶褐色	密	良好	ﾊｹ	—	平安	
37	C-3	C-3	土師器	鉢？	—	—	—	—	茶褐色	密	良好	ﾊｹ	—	平安	
38	1住	45	須恵器	甕	—	—	—	—	淡灰色	密	良好	ﾊｹ・ﾀﾀｷ	—	平安	
39	D-2	D-2	須恵器	甕	—	—	—	—	淡黄灰色	密	良好	ﾊｹ・ﾀﾀｷ	—	平安	
40	D-3	D-3	須恵器	甕	—	—	—	—	淡黄灰色	密	良好	ﾊｹ・ﾀﾀｷ	—	平安	
41	1住	1住	須恵器	甕	—	—	—	—	灰色	密	良好	ﾊｹ・ﾀﾀｷ	—	平安	

《出土石製品 観察表》

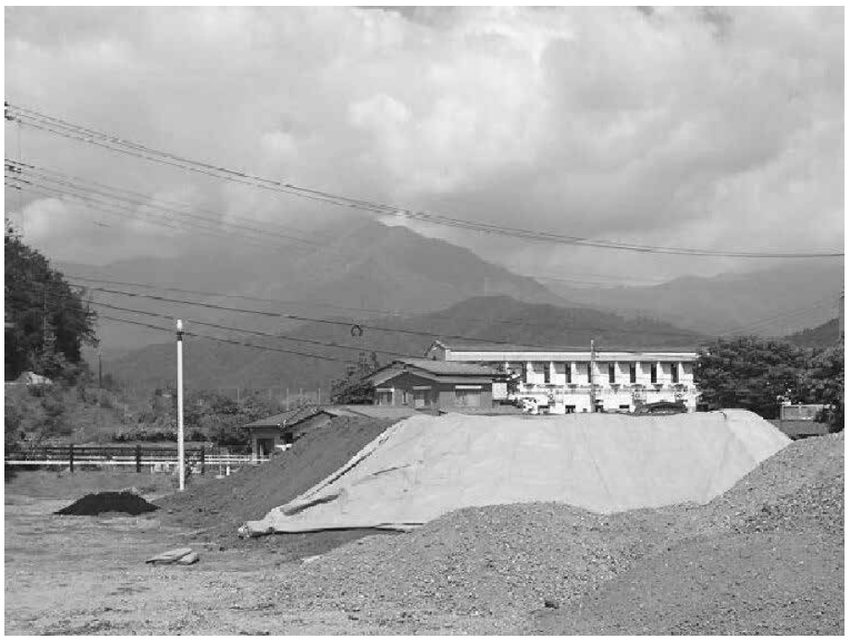
No.	遺構	注記No.	種別	器種	長さ〔cm〕	幅〔cm〕	厚さ〔cm〕	時期	備考
1	1住	S-1	―	―	12.80	3.80	3.40	平安	

《試掘調査時出土土器類 観察表》

No.	遺構	注記No.	種別	器種	口径〔cm〕	器高〔cm〕	内深〔cm〕	底径〔cm〕	色調	胎土	焼成	調整	残存率〔%〕	時期	備考
1	5ﾄﾚ	ﾂﾙｼﾞｿｳ5ﾄﾚ	土師器	坏	(11.80)	3.80	3.40	4.50	明茶褐色	密	良好	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	75	平安	
2	5ﾄﾚ	ﾂﾙｼﾞｿｳ5ﾄﾚ	土師器	鉢	(28.40)	―	―	―	暗茶褐色	密	良好	ﾅﾃﾞ・ﾊｹ	―	平安	
3	5ﾄﾚ	ﾂﾙｼﾞｿｳ5ﾄﾚ	須恵器	甕	―	―	―	―	灰色	密	良好	ﾅﾃﾞ・ﾀﾀｷ	―	平安	
4	5ﾄﾚ	ﾂﾙｼﾞｿｳ5ﾄﾚ	土師器	甕？	―	―	―	―	明茶褐色	密	良好	ﾅﾃﾞ	―	平安	
5	5ﾄﾚ	ﾂﾙｼﾞｿｳ5ﾄﾚ	土師器	甕？	―	―	―	―	明茶褐色	密	良好	ﾅﾃﾞ	―	平安	

写真図版

口絵1



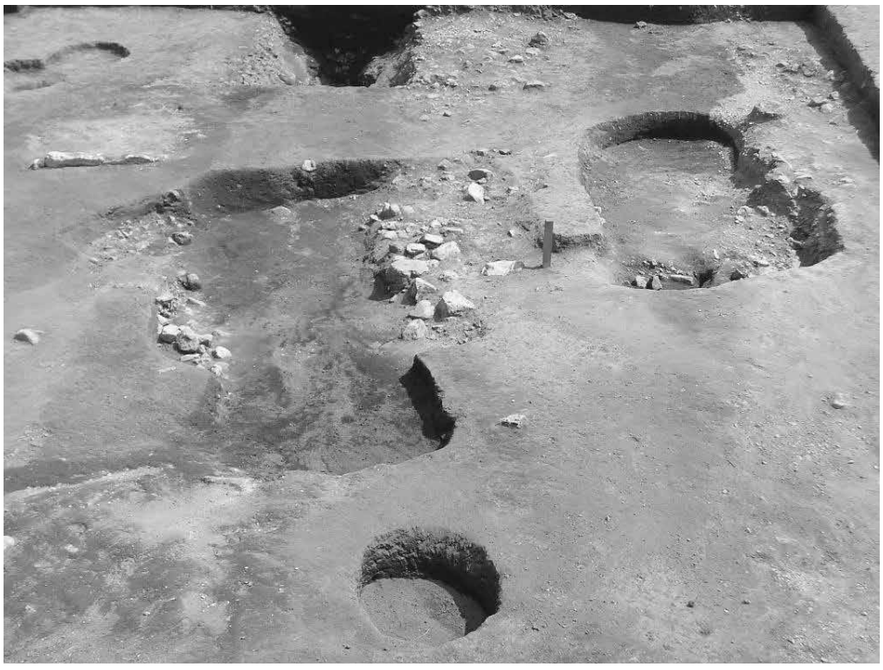
調査地より三ツ峠を望む

調査前の状況　その１

調査前の状況　その２

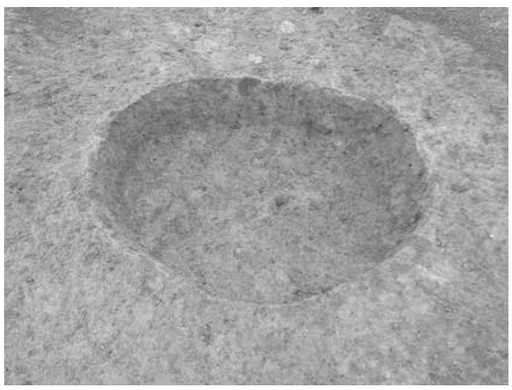
表土剥ぎ風景　その１

表土剥ぎ風景　その２



住居跡完掘状況（　右第１号住居跡・左第２号住居跡　）

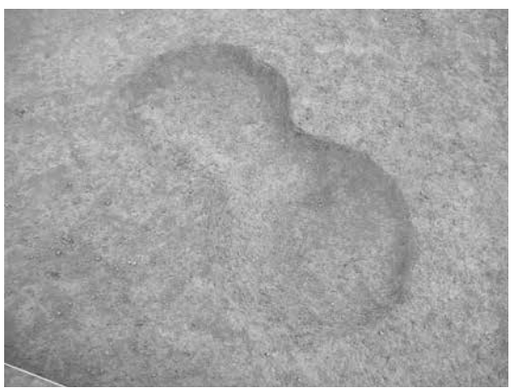
第１号住居跡遺物出土状況



第１号土坑完掘状況

第２・３号土坑検出状況

第４号土坑完掘状況

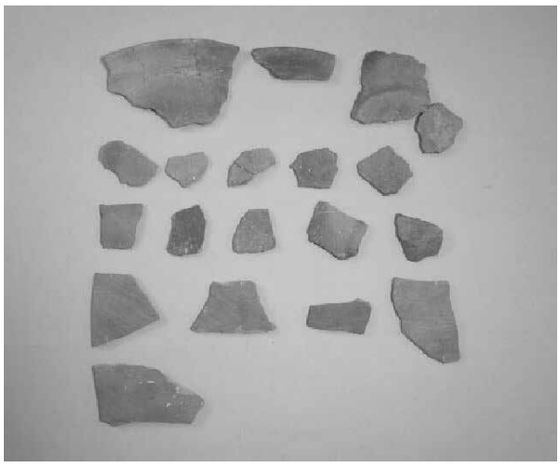


第５・６号土坑検出状況

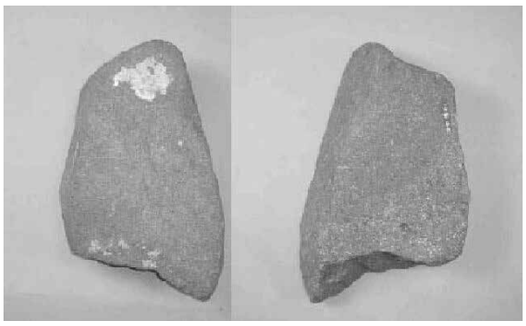
調査風景

第１号住居跡出土遺物　1

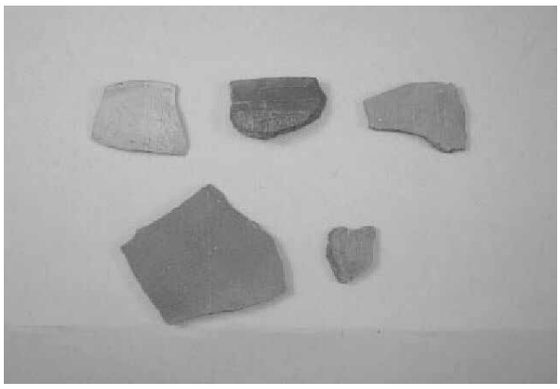
第１号住居跡出土遺物　2



第１号住居跡出土遺物　3



第１号住居跡出土遺物　4



試掘調査出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	よんのがわいせき
書名	四ノ側遺跡
副書名	都留児童相談所建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第236集
編著者名	吉岡　弘樹　・　輿石　逸子
発行者	山梨県教育委員会
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話	〒400-1508　山梨県甲府市下曽根町923　TEL055-266-3016
発行年月日	2006年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
よんのがわ いせき 四ノ側遺跡	やまなしけん つるし たはら 山梨県 都留市田原3-3-5	19204		35° 32' 22"	138° 53' 46"	2005年 5月23日 ～6月24日	550	都留児童相談所 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
四ノ側遺跡	集落	平安時代	竪穴住居跡 土坑	土師器、須恵器	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　　第236集

よんのがわ　いせき
四ノ側　遺跡

都留児童相談所建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成18年３月20日　　印刷

平成18年３月31日　　発行

編　　集　　山梨県埋蔵文化財センター
〒400-1508　山梨県甲府市下曽根町923
TEL　０５５（２６６）３０１６
maizou-bnk@pref.yamanashi.lg.jp

発　　行　　山梨県教育委員会
山梨県福祉保健部

印　　刷　　㈱峡南堂印刷所